

感染するより怖い コロナ差別

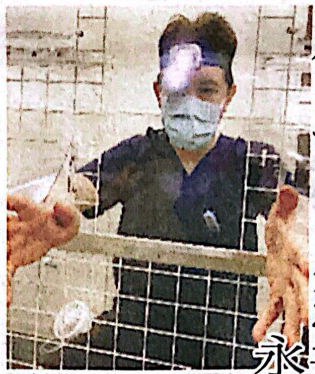
フリーランスライター 東野りか

筆者は昨年の隔離療養生活明けから2つのクリニックを受診した。

1つ目は呼吸器内科クリニックで、2つ目はコロナ後遺症専門外来だ。1つ目で処方された薬(あとで風邪薬だと判明)はほとんど効かず、2つ目では亜鉛服用と漢方服用、そしてBスポットという耳鼻科での治療を勧められた。Bスポット治療は上咽頭(鼻の奥)に塩化亜鉛などを直接塗布するもので、とて

つもなく痛いらしい。しかも10回ほど施術が必要で、耳鼻科医の手法によって治療のクオリティーが左右される。さらに耳鼻科医があまりやりたがらない治療法と聞いて尻込みし、結局、治療を受けなかった。

鼻づがいと亜鉛服用を継続したことで、味覚・嗅覚障害がある程度回復したのではと思うが、時間の経過と共に自然治癒したかもしれず、実際はどうか分からない。医師たちも、患者の診察を継続しながらデータを蓄積し、それを後遺症の治療法にアップデートしていくしかないだろう。現在はオミクロン株の亜種やその後遺症も報告されており、油断できない。



パンデミックを予見していた
永田理希医師

後遺症治療で処方された薬は「風邪薬」だった

石川県加賀市の「ながたクリニック」は、北陸3県で唯一の新型コロナ後遺症専門外来を開院し、症状を訴える患者の診察を行っている。院長は感染症や総合診療を得意分野とする永田理希さん(50歳写真)。永田医師は研修医時代から感染症分野の重要性に気づき、その後「感染症倶楽部」を立ち上げ、全国の医療従事者に向けた講座もしている。また、2009年の新型インフルエンザの感染拡大の際、「近い将来、強毒型新型インフルエンザが流行する」と予見。クリニック内に通常とは別の入り口からアプローチできる個室もつくっていた。もっとも、世界中に蔓延したのはインフルエンザではなく、新型コロナウィルスだった。感染症の「プロフェット」も予測できなかった

が、後遺症についてはさらに未知の領域といえそう

だ。「必ず治るとは言えませんが、『臨床データは少ない』、どんなに長くとも一年もすればよくなる人が多い。それまで頑張りましょう」と励ま

しています。その声かけだけで患者さんは安堵したり、なかに涙を流す方もいたります。

後遺症には、乱れた心身のバランスを正しく整える漢方を処方する東洋医学の方が西洋医学より向いていることが多いですね。現時点では後遺症に関して分からないことが多いのですが、患者さんに寄り添うスタンスが一番大事だと考えています(永田医師)

全国では診察に消極的な医療機関が多く、頭痛や咳などの後遺症が残っても、担当医に「検査結果はどれも悪くない」と言われ、他の病院では診察を拒否される。あちこちの医療機関をさまよつ、迷子の患者が多く存在する。

(つひ)

感染するより怖い コロナ差別

フリーランスライター 東野りか

迷子の患者は、不安な思いが胸のうちにたまっているの、その思いの丈を永田理希医師(写真)は受け止める。石川県加賀市にある「ながたクリニック」の院長だ。

初診であれば1時間近くかけて後遺症の経緯を聞きだし、対応可能な治療と症状に応じた漢方をメインに薬を処方する。筆者も昨年、コロナに感染。味覚・嗅覚障害などの後遺症に悩み、2つのクリニックにかかったが、短時間のシステマチックな診療だった印象がある。もっとも、どちらも首都圏の医療機関であり、数多くの患者が押し寄せるので、その分は差し引いて考えないといいないだろう。

永田医師は、西洋医学的な見極めもしつつ、カウンセリングと漢方診療、3つのアプローチを後遺症の主な診察としている。ただ、昨年末までは余裕があったが年明けから診察の現場の様相が変わってきた。

他の医療機関で診察を拒否されたり、いつまでも症状が改善しないなどの悩みを抱える、迷子の患者を受け入れているのだ。後遺症の症状や経緯は人によって異なり、初回の診察に時間がか



「こういう事態になって近隣の病院も受け入れが難しいようです」

かる。しかも、クリニックには後遺症外来の患者だけでなく、発熱外来や一般の外来患者も来院する。後遺症の患者に対して長時間の診察をしていると、「こんなに待たされるのはなぜか」と他の患者からのクレームが出てきてしま

う。「私一人で診察しているため、今後の感染拡大を考えれば、完全指定予約診療やオンライン診療なども考えざるを得ないでしょう。オンラインとなれば、触診など必要な検査もできない。初診だけでも対面で診察したいのですが、来院できない遠方の患者さんへの対応や効率化も考えないと……。私だけではなく、スタッフにかかる負担も大きいのが懸念材料です」(永田医師)

後遺症の患者を受け入れても経営的にプラスになるわけではない。あえてリスクの高い診療を行っている永田医師を突き動かすのは、病に苦しんでいる人を救いたいという医師としての使命感と職人気質だ。10人の患者がいれば、10の「見立て」が必要だが、現在の感染爆発の状況下では、丁寧な診察が難しくなるというジレンマに永田医師も陥っている。

さらに永田医師を悩ませているのが、ワクチン後遺症(ワクチンを接種したことで、頭痛、発熱、倦怠感などに悩む)の患者が増えていること。症状が深刻になり、日常生活にも支障を来す患者もいるという。

「こういう事態になっているので、近隣の病院やクリニックでも、検査だけでなく診察を行う発熱外来や後遺症外来での受け入れが増えることを望んでいます。なかなか難しいようです」(永田医師)

医師が疲弊すれば診察のパフォーマンスが落ちるので、医師にとっても患者にとってもデメリットしかない。だから患者もあらかじめ後遺症の症状や治療歴、薬の服用歴などを時系列にまとめ、すいている曜日・時間帯に来院することを勧めたい。

(つひ)